

ジョン・エヴァレット・ミレイ研究史

石 塚 晃

**An Examination of Exhibitions and Publications
Focusing on the Life and Art of John Everett Millais**

Akira ISHIZUKA

要 旨

In this paper major exhibitions and publications, especially those of monographs, focusing on a Victorian British painter John Everett Millais are examined. The author has tried to make an as complete list as possible in terms that it contains all the exhibitions and the book publications which include the name of the artist or any of his works in their titles. There is an astonishing fact that no major exhibition covering his entire career had ever been held for more than a century since 1898, revealing overall neglect of Millais's art until quite recent years. This inappreciative treatment was mostly caused by the attitude which perversely tried to judge the value of his works, especially his later works since 1860's, by the standard of the Pre-Raphaelite principle, the Brotherhood whose major member he had been but only for five years at the beginning of his artistic career, and more importantly by the doctrine of avant-garde or modern art which had negated the value of works by Royal Academicians and many other Victorian artists. Only toward the end of the twentieth century the prevalent low evaluation of Millais's art, especially of his later work, began to be reconsidered. The re-evaluation keeps carried on, accompanied by the carrying out of the comprehensive retrospective beginning at the Tate Britain in 2007 followed by visits to Netherlands and Japan in 2008. By examining the past and recent publications at this point of time, this paper intends to clarify the current situation in the course of research history on the life and art of John Everett Millais.

序

2008年、北九州市立美術館(6月7日 - 8月17日)とBunkamura ザ・ミュージアム(8月30日 - 10月26日)において、ヴィクトリア朝時代のイギリスの画家ジョン・エヴァレット・ミレイ(John Everett Millais)の本格的な回顧展「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」が開催された。テイト・ブリテンで2007年9月26日から2008年1月13日まで開催された「ミレイ展(Millais)」(以下、「Millais展」)が巡回してきたもので、巡回先は、アムステルダムファン・ゴッホ美術館と日本の2会場のみであった。テイト・ブリテンに比べて日本会場では作品数がかなり減り、前者で138点だった総作品数²が後者では約半分の73点となり、うち油彩画は前者の90点に対し、後者では52点であった。作品の入れ替えもあり、テイト・ブリテンでは出品されなかったが日本会場では出品されたものも少なかった。³これほど本格的なミレイの回顧展は、1898年、ロンドンの王立美術アカデミーで開催された「故ジョン・エヴァレット・ミレイ卿作品展(Exhibition of Works by the Late Sir John Everett Millais, Bart.)」以来のことであった。19世紀末のこの展覧会以来、20世紀をすっぽりと含んで110年もの間、《オフィーリア》によって誰もがその名を知るミレイという画家の全体像を紹介する本格的な展覧会は、実は一度も開催されたことがなかったのである。

その理由の1つは、ミレイがラファエル前派兄弟団の結成メンバーだったことを殊更に重視するとらえかたである。そのような見かたは、芸術的理想の追求を放棄してアカデミーの規範と社会の嗜好に迎合するようになり、世俗的成功を求める人気作家に墮落していったというお馴染みの否定的評価へと繋がり、画歴の中期以降の作品は、もっぱら並外れて正確な観察力と優れた描写力について称えられるのみという扱いが定着してしまったのである。更にはより大きな芸術の潮流として、モダン・アートの隆盛があり、当時のアカデミックな作品全般がほとんど価値のないものとして顧みられなくなったことが大きい。この価値観の変化の前にはラファエル前派兄弟団の作品群も力を失った。ラファエル前派とその周辺の画家たちの活動の意義が再評価されるようになったのは第二次世界大戦後、特に1960年代のことであり、⁴それによってミレイの兄弟団時代の作品については価値が見直されたが、兄弟団解散後の画業に対する評価はその後も低迷し続けた。

しかし2007年ロンドン発の回顧展を見れば、あくまでラファエル前派時代の主張を基準にその後のミレイの作品を判断し通そうとすることが不可能であることは明らかである。会場におよそ年代順に並べられた作品群を一巡すると、彼の様式が1862年頃から1867年頃の間大きく変貌し、しかもその変化は一方的なものでなく、様式が全般的に変化した後も作品によってはラファエル前派の様式に回帰しているものがある。また、ティツィアーノ、ベラスケス、レンブラント、レノルズ、ターナー、コンスタブル、マネなど、筆者の直感的な印象であるが過去の複数の巨匠たちの作風を思い起こさせる特徴をそなえた作品がそここ

こに見出され、どうやらミレイは、異なる複数の様式を試したか意識的に使い分けた画家であったこともわかる。この点はミレイの後期作品に対して発せられた折衷的であるという批判が根拠とする性質でもあったのだが、それにしても中・後期の作品群や、1870年代から本格的に取り組まれた風景画の前に立ってその主題と様式の多様性に直面すると、旧来のラファエル前派時代偏重の見かたは彼の画業全体に対する正当な評価へと導かないばかりか、それはこの画家のもつ別の本質を見落とすように仕向け、画家の全体像をわからなくしていたのだ、ということが実感された。

彼の多面性をそなえた芸術を正当に評価するには、イギリス美術の偉大なる伝統とヴィクトリア朝時代の美術界の動向はもとより、フランスを主とする大陸における美術の動向も視野に入れ、ミレイの主題選択や様式に認められる変化の意味を丹念に考察していくことが不可欠である。作風の変遷の中で変わらないものはあるか、なくなったものはあるか、何が、何処あるいは誰から、どの程度取り入れられたのか、あるいはジャンルは違ってても複数の作品に共通項を見出せるかなど、より多くの角度からとらえ直し、言葉を尽くして語る必要がある。2007年ロンドン発の回顧展は、直近までの新しい研究成果を踏まえ、ラファエル前派兄弟団時代より後の時期の代表作も一堂に集め、画家ミレイの画業全体についての、よりバランスのとれた評価と、イギリスに限定されない美術史上における正当な位置づけへと促すことを主たる目的として開催されたものと理解することができよう。

この「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」より前に日本で開催された最も新しい関連する内容の美術展は、2000年4月-12月の「ラファエル前派展」(滋賀県立近代美術館、安田火災東郷青児美術館ほか)であろう。これは同派の作品を多数所蔵するマンチェスター市立美術館(Manchester City Galleries)が改装中の折に、美術館のコレクションの中核部分を含んで構成された内容であった。最も印象的だったことは、他の出品作と比較してのミレイ作品の様式の特異性であった。人物画として《うつろな思い》⁵(1855年)、《せめて一房の髪を》(1857-58年)、《ステラ》(1868年)の3点が出品されたが、いずれもラファエル前派とその追従者のものとは異なる様式で描かれており、展覧会場で異彩を放っていた。特に《ステラ》に見られる大きな筆致を使った描法は、ラファエル前派の芸術理念の否定につながる様式と言っても過言ではない。一方、風景画《冬の薪》⁶(1873年)においては、ラファエル前派的な様式である緻密な細部描写とそのことを通して描かれた内容に象徴性を含ませる意図を確かに認めることができるのだが、この作品は上記の非ラファエル前派的な人物像より後の年代のもので、兄弟団の解散から20年も経過した時期の作品である。この現象をどう説明するのか、という問題がある。どの出品作も兄弟団の解散後に制作されたものであるから、ミレイはラファエル前派兄弟団の「元」メンバーという位置づけだったのかもしれないが、この画家をあくまでもラファエル前派に結びつけてとらえようとするものの限界を作品自体が語っているように思えた。

話は前後するが、2008年の「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」の後、2009年7月 - 2010年2月に府中市美術館ほかで開催された「ターナーから印象派へ」展には、ミレイ作《グレン・バーナム》⁷ (1891年) が出品された。この展覧会は主に近代イギリス風景画の展開を回顧する企画で、ミレイの作品を「純粹風景主題と自然」というサブ・テーマのもとで展示した。つまり、この作品に、ラファエル前派の特徴である克明な細部描写がもたらす象徴性もロマン主義性も認めず、風景の描写自体を主たる目的とした作品と位置づけたことになるが、ミレイの作品にはこのような文脈でも出会うのである。⁸

ミレイによる作品の現在の所在の全体像を正確に知るには、後述するカタログ・レゾネの刊行を待たなければならないが、概況を述べるなら、最も多くの重要作品が存在するのは、イギリス国内である。周知のようにヴィクトリア朝時代のイギリス絵画は、繁栄する国力に支えられた自国民によって積極的に購入され、一般的には海外への流出が比較的少ない状況にある。

しかし画家によって事情は異なるので、ミレイについて、ロンドンから始めて一通り概観していこう。最も充実したコレクションを有しているのは、ミレイ自身がその創立に重要な役割を果たしたかつてのテイト・ギャラリー、現テイト・ブリテンである。ミレイはヘンリー・テイト卿のお気に入りの画家であり、ラファエル前派時代の《両親の家のキリスト》、《マリアナ》、《オフィーリア》などがこの美術館に所蔵されていることはよく知られている。ナショナル・ポートレート・ギャラリーも、ミレイがその設立に向けて尽力した美術館であるが、イギリス政治史に名を残すグラッドストーンやディズレーリの肖像画など、ミレイの作品がコレクションの重要な位置を占めている。ロンドン旧市街にあって現在もシティー (the City of London Cooperation) の中心として機能しているギルドホールに隣接するギルドホール・アート・ギャラリー (Guildhall Art Gallery) においては、数は多くはないが、ミレイの作品がやはりコレクションの中核の一部を成している。ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館には、最初の油彩発表作《ペルーのインカ国王を捕らえるピサロ》が、ラファエル前派兄弟団とそれに関連する作家たちの作品を集めた空間に展示されている。ミレイが生涯の最後に残された短い期間会長を務めた王立美術アカデミーも彼の作品を所有している。

ロンドン以外のイギリス国内としては、ラファエル前派兄弟団のパトロンが多かったイングランド北部・中部工業都市に多くの重要作品が存在しており、主要な美術館として、リヴァプールのレイディー・リーヴァー美術館 (Lady Lever Art Gallery) とウォーカー美術館 (Walker Art Gallery)、既述のマンチェスター市立美術館、バーミンガム美術館 (Birmingham Museums and Art Gallery) を挙げることができる。大学が重要作を所蔵している例として、オックスフォード大学アシュモリアン美術館、ケンブリッジ大学フィッツウィリアム美術館、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ・コレッジ (Royal Holloway College, University of London) がある。他にアバディーン (Aberdeen Art Gallery and Museums)

グラスゴー (Kelvingrove Art Gallery and Museum)、パース (Perth Museum and Art Gallery) などスコットランド諸都市の公立美術館や、ウェールズの美術館 (National Museum of Wales, Cardiff) も作品を所蔵している。ただし、どの美術館のコレクションも、単独でミレイの画業の全体像を見渡せる程の内容とはなっていない。

次にイギリス国外を見てみよう。イギリス以外で最も多くの重要作品が所蔵されているのはアメリカ合衆国である。アメリカに渡った作品は、ニュー・ヘイヴンのイエール大学附属イギリス美術センター (Yale Center for British Art) や、デトロイト (Detroit Institute of Arts)、ミネアポリス (Minneapolis Institute of Arts)、ロサンゼルス (J. Paul Getty Museum) などの美術館に分散して存在している。アメリカ合衆国以外の主な作品所在地としては、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、南アフリカ共和国といった、大英帝国時代からイギリスとゆかりの深い国々が挙げられる。日本、イタリアなどにも作品が存在し、「ミレイ展 (Millais)」が日本に巡回して来た折には、国立西洋美術館と新潟県立近代美術館の所蔵作品が出品された。更にイギリス、アメリカの個人コレクションにも重要作品が少なくない。ミレイの場合、最も重要な個人コレクションは、Geoffroy Richard Everett Millais Collection である。

このように分散した作品の所在状況に照らせば、画歴の初期から最晩年の作品までを一堂に集めた「Millais 展」とその日本への巡回の意義はまことに大きかったと言えよう。

1. ジョン・エヴァレット・ミレイの展覧会

「Millais 展」のカタログ *Millais* (Tate Britain, 2007 年) には、過去の展覧会一覧が収録されており、貴重な情報を提供してくれる。⁹ これを主たる資料とし、その他の文献も適宜加えながらまとめてみたい。

カタログ等に記載のある主なものということになるが、ミレイの存命中の展覧会としては、1881年にロンドンの美術協会 (Fine Art Society) において小規模な「ジョン・エヴァレット・ミレイ作品展 (The Collected Works of John Everett Millais)」が開催され、19点が出品された。画家が准男爵に叙せられた翌年の1886年には、19世紀第4四半期から20世紀にかけてのイギリス美術の展開に重要な役割を果たしたことで知られるロンドンのグロウヴナー・アート・ギャラリー (Grosvenor Art Gallery) において、「王立アカデミー会員ジョン・エヴァレット・ミレイ卿作品展 (Exhibition of the Works of Sir John E. Millais, Bart., R.A.)」¹⁰ が催された。これは大規模な展覧会で、集められた作品数は、それまでに画家が完成させた数の半分近い159点にのぼり、展覧会は好評で、作品はよく売れた。¹¹ これら以外にもミレイは、万国博覧会を含む国内外の様々な展覧会に精力的に出品したことが知られている。このような積極的な参加は広報活動としてよく機能し、画家の名を広く知らしめることになった。

画家が没した後は、1898年に、生涯最後の約半年間だけ会長であった王立美術アカデミー¹²で回顧展「故ジョン・エヴァレット・ミレイ卿作品展 (Exhibition of Works by the Late Sir John Everett Millais, Bart.)」が開催された。この展覧会が、今回の回顧展が開かれるまでミレイの作品展として最大規模だったもので、油彩 186 点、素描・水彩・油彩による習作等 56 点が展示された。¹³次は 1901 年、再びロンドンの美術協会において、「故 J.E. ミレイ卿の絵画、素描、習作展 (Pictures, Drawings, and Studies by the late Sir J. E. Millais, P.R.A.)」が開催された。そして以後は長い間、この画家をテーマとした美術展の開催が途絶えることになった。

次にミレイをテーマとする展覧会が開かれたのは 66 年後の 1967 年のことで、ロンドン、王立アカデミーとリヴァプール、ウォーカー美術館において「ミレイ：ラファエル前派 / 王立アカデミー会長展 (Millais: P.R.B./P.R.A.)」が開催された。その後は、1976 年のポーツマスの市立美術館 (City Museum and Art Gallery) におけるミレイを含むラファエル前派と周辺の画家の素描展 (Pre Raphaelite Drawings: An Exhibition of Drawings by William Holman Hunt, John Everett Millais, Dante Gabriel Rossetti, and Ford Madox Brown) を除いて、1979 年まで、ミレイをテーマとする展覧会の開催はなかった。

1979 年は画家の生誕 150 周年にあたり、2 つの展覧会が開催された。このうち「ジョン・エヴァレット・ミレイ素描展 (The Drawings of John Everett Millais)」だけがイギリス各地を巡回し、生誕 150 周年を銘打った「王立アカデミー会長ジョン・エヴァレット・ミレイ卿：生誕 150 周年記念展 (Sir John Everett Millais, Bart., P.R.A. (1829 1896) : An Exhibition Celebrating the 150th Anniversary of Millais's Birth)」は、画家が幼少時代を過ごしたチャネル諸島ジャージー島のみにおける開催であった。

1984 年にはラファエル前派についての大規模な展覧会「ラファエル前派 (The Pre-Raphaelites)」がテイト・ギャラリーで開かれた。同美術館は、その後も 2000 年に「ラスキン、ターナー、ラファエル前派 (Ruskin, Turner and the Pre Raphaelites)」、2004 年に「ラファエル前派のヴィジョン (The Pre Raphaelite Vision)」を開催し、その都度ミレイの初期の重要作品を展示したが、ミレイに焦点を当てた展覧会は 2007 年まで催されなかった。¹⁴

ミレイに関する次の節目は、没後 100 周年の 1996 年であった。この年、イギリスで 4 つの企画が実行されたが、どれも小規模のものにとどまった。1 つは、画家の出身地サウサンプトンにある研究所 (The Southampton Institute) のミレイ・ギャラリーにおける「ジョン・エヴァレット・ミレイ 1829 1896 年：100 周年展 (John Everett Millais 1829 1896: A Centenary Exhibition)」である。だがこれは開催期間が 1 か月にも満たないものだった。イースト・サセックスのライ・アート・ギャラリー (Rye Art Gallery) における「ミレイの挿絵展 (Millais's Collected Illustrations)」と、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館

における「テニソンとトロロブ：ジョン・エヴァレット・ミレイによる本の挿絵展 (Tennyson and Trollope: Book Illustration by John Everett Millais)」は、ミレイが多くの作品を残しながらそれまで等閑視されてきた本の挿絵に焦点をあてた企画であった。他にテイト・ギャラリーが「ミレイ 100 周年展示 (Millais Centenary Display)」として、同館所蔵の作品群を公開した。

その後は作品のジャンルを特定した展覧会が 2 つ開催された。1999 年、ロンドン、ナショナル・ポートレート・ギャラリーにおける「ミレイ：肖像画展 (Millais: Portraits)」は、ヴィクトリア朝後期に最も人気ある肖像画家だったミレイのこの分野における業績を再検証する企画であり、ミレイ研究にとって重要な出来事となった。2004 年には、ミレイの素描と出版された図書の挿絵に関しては美術館として最大のコレクションを有するとされるパーミンガム美術館において、「ジョン・エヴァレット・ミレイ：素描と出版された図書の挿絵展 (John Everett Millais: Drawings and Printed Illustrations)」が開催された。同館はミレイ以外にもラファエル前派と周辺の画家たちの素描の重要なコレクションを有しているが、その中から特にミレイに焦点を当て、同館の所蔵品に他所からの作品も加えて、挿絵画家としてのミレイを改めて紹介する企画となった。

このように概観してみると、1898 年の回顧展以外には、ミレイの全画歴をカバーして主要作品を集めた展覧会が開かれたことはほとんどなかったことがわかる。19 世紀末、ヘンリー・テイト卿によるコレクションの寄贈を機にイギリス近代美術のための国立美術館 (The National Museum of British Art. 後のテイト・ギャラリー、現テイト・ブリテン) が創設されるにあたっては、ミレイにも一定の功績があった。美術館は傍らに画家の像を立てて功績を記念し、またテイト・ブリテンはミレイの重要作品を最も多く所蔵しているのだが、その美術館においてさえ 2007 年までの過去 1 世紀以上、本格的な展覧会の開催はなかったのである。

2. ミレイをテーマとする日本語の文献

この章では日本におけるミレイをテーマとした出版を概観する。日本語の文献については、2008 年の「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」カタログ中に松下由里氏によって作成された日本語文献一覧が収録されている。¹⁵ それによると、2008 年の回顧展開催時まで、日本人によるミレイの研究書は書かれたことのないことがわかる。定期行物中の文献としては、明治末期に刊行された『白百合』(第 1 巻 2 号、1903 年 12 月)、『月刊スケッチ』(第 2 巻 9 号、1905 年 12 月)、『美術新報』(第 10 巻 9 号、1911 年 7 月) にミレイに関するものが見出されるが、それ以後は 1978 年までミレイの名をタイトルに含む文献は見出されない。

1978 年以降で題目中にミレイの名を含む文献は、上記の文献一覧にもとづきながら、それに未収録のものも加えると、以下に列挙したようになる。¹⁶ このリストには英文学などの

領域の研究者によるものも美術史との関わりの程度によって適宜含めている。

吉田正俊「ラスキンとミレー（美術余話）」『ラファエル前派とモリス』週刊朝日百科・世界の美術 6、1978年、p.169。

千足伸行「ジョン・E・ミレイス《マリアーナ》」日本経済新聞、1982年5月11日、p.25。

高橋達史「ヴィクトリア朝万華鏡 20 草葉の陰で：A.ヒューズ《海からの帰郷》、J.E.ミレイ《休息の谷》」『芸術新潮』新潮社、1990年9月号、p.118-122。

松浦暢「ラスキンとミレー：その女性像をめぐる」『ユリイカ』第22巻11号（ラファエル前派特集号）1990年10月、p.77-91。

高橋裕子「オフィーリア：絵になったシェイクスピア劇のヒロイン、ジョン・エヴァレット・ミレイ」『音楽をめざす絵画 19世紀Ⅳ』NHK日曜美術館 名画への旅 20、講談社、1993年、p.56-75。

千足伸行「二枚の絵、ミレー《オフィリア》／川崎小虎《オフィリヤ》」毎日新聞、1996年5月26日。

『ロセッティ／ミレイ：物語を紡ぐ運命の女たち』週刊美術館 18、小学館ウィークリーブック、小学館、2000年6月。

長嶺倫子「ヴィクトリア朝の仮装の少女像：ジョン・エヴァレット・ミレイ《チェリー・ライブ》（1879）その複製と模倣」『人間文化論叢』第5巻、2002年、p.379-388。

金光陽子「オリジナリティと複製：J.E.ミレイの《シャボン玉》とベアーズ石鹸の広告」『美学』第58巻2号、2007年9月、p.29-42。

原英一「小説家漱石、その語りの原点：ホガース、ドラローシュ、ミレイ」『英語青年』154(6)、2008年、p.323-326。

高橋氏の『芸術新潮』への寄稿文は、ミレイの《休息の谷》¹⁷を、ヴィクトリア朝時代の強迫的なまでの「死への想い」という観点から、同時代の他の画家による墓地を舞台とした作品と比較しつつ論じている。そして当該作品を雰囲気や暗示には富むが物語性を欠いた無主題絵画の先駆と位置づけ、併せて当時の墓地事情にも言及している。1990年という時点において、ラファエル前派時代より後の時期に制作された作品を、兄弟団の運動と一端切り離して論じているという点に関しては、日本における先駆的な論考である。

長嶺氏と金光氏の論文はともに、新聞・雑誌の付録や企業広告という複製を介して大衆の中にイメージが行き渡った作品を採り上げ、芸術社会学的な問題を論じたものである。長沢氏は、《チェリー・ライブ》のイメージが広く受容される過程について、仮装舞踏会における仮装と美術作品の関係という服飾史的な視点を加えて考察している。金光氏は、《シャボン玉》の複製の企業広告への流用という出来事を糸口として、当時の絵画作品に関する著作権制度について調査している。ともに回顧展開催前の時点でミレイの後期作品を採り上げた

数少ない論考である。

上記のすべての文献が、図版主体の一般向けの書籍か、定期刊行物中の論文、新聞・雑誌への寄稿文であるため、単行図書としては、2008年の回顧展カタログ『ジョン・エヴァレット・ミレイ展』（朝日新聞社編）が、その時点において唯一の、題目にミレイの名を冠し、かつ、学術的な内容をもつ日本語の文献ということになる。内容のほとんどはテイト・ブリテンで開催された「Millais展」のカタログ *Millais* の翻訳であるが、巻頭に木島俊介氏による「ジョン・エヴァレット・ミレイ - 芸術家の生涯」、巻末に松下氏による上記の日本語文献目録が追加されている。また、テイト・ブリテンでは出品されず日本会場で出品された作品についての解説も、テイト・ブリテン発行の *Millais* に載っていない内容である。それらの作品解説は、*Millais* の執筆者 J. ロウゼンフェルドと A. スミスが担当している。¹⁸

2007 - 2008年の回顧展を機に、以下のような出版があった。

「展覧会：知られざるミレイの軌跡」『ニューズウィーク』第22巻45号、阪急コミュニケーションズ、2007年11月、p.71。

齋藤貴子「J. E. ミレイ再評価と PRB 研究の新時代に向けて」『英語青年』（特集 ラファエル前派）第154巻4号、2008年7月、p.216-220。

「《オフィーリア》から遠くへ：ジョン・エヴァレット・ミレイの全貌」『芸術新潮』新潮社、2008年9月号、p.137-143。

『ミレイ』週刊西洋絵画の巨匠24、小学館ウィークリーブック、小学館、2009年7月。

齋藤氏による寄稿は、テイト・ブリテンでの「Millais展」の意味を本邦でいち早く論じ、近年のミレイ研究の動向の中に位置づけたものである。肖像画家、風景画家としてのミレイの意義を指摘し、特にイギリスにおける唯美主義の画家としてのミレイの重要性については、より踏み込んだ議論を行っている。

最後に挙げた『ミレイ』（週刊西洋絵画の巨匠）は一般向けの雑誌であるが、同じ出版社から2000年に刊行された「週刊美術館、小学館ウィークリーブック」中の『ロセッティ / ミレイ：物語を紡ぐ運命の女たち』と比較すると、2008年の回顧展を反映した内容になっていることがわかる。2000年の雑誌では、ミレイを従前通りラファエル前派の枠でとらえているため、ミレイ作品の収録数は初期作品を中心に10点に満たなかったのに対し、2009年の雑誌ではラファエル前派時代より後の作品が回顧展出品作を中心にはるかに多く収録されており、解説もミレイの画業の全体像を視野に入れた内容になっている。¹⁹

なお、1999年、武蔵大学から、同大学が所有するラファエル前派関連の貴重な蔵書の目録『ラファエル前派：書物と肖像から』が刊行された。また、郡山市立美術館は日本では稀なイギリス美術の優れたコレクションを所蔵しており、ラファエル前派の作家たちの作品も

多数含まれている。同美術館からコレクション・カタログ『郡山市立美術館所蔵品目録 1992 年版』が発行されている。

3 . ミレイをテーマとする海外の文献：単行図書を中心に

次に、海外で出版された単行図書について調査した結果である。文献リストにまとめたが、これには展覧会カタログは含め、論文と定期刊行物への寄稿文は基本的に除外した。論文・寄稿文については、様々な視点からのミレイ研究にとって基本的文献となると考えられるもののみ記載したが、そこに明確な基準があったわけではない。意図したのは、タイトルからミレイもしくはミレイの芸術をテーマとしたことが明らかな単行図書の一覧である。

まず、ミレイの生前から没直後の 19 世紀末までに出版された図書の一覧は、以下のようになった。

The Millais Gallery, Boston, 1878.

August Lang, *Notes on a Collection of Pictures by Mr. J. E. Millais, R.A. Exhibited at the Fine Art Society's Rooms, London, 1881.*

Emilie Isabel Barrington, "Why is Mr. Millais our Popular Painter?" *Fortnightly Review*, vol. 32, August 1882, p.60-77.

The Life and Work of Sir Frederick Leighton, Bart., Sir John Everett Millais, Bart., L. Alma Tadema, London, 1886.

F. G. Stephens, *Exhibition of Works of Sir J. E. Millais, exh. cat., Grosvenor Gallery, London, 1886.*

The Life and Work of Sir Frederick Leighton, Bart., President of the Royal Academy, Sir John Everett Millais, Bart., Royal Academician, L. Alma Tadema, Royal Academician, London, 1886.

John Ruskin and A. Gordon Crawford, *Notes on some of the Principal Pictures of Sir John Everett Millais Exhibited at the Grosvenor Gallery, 1886, London, 1886.*

John Everett Millais, "Thoughts on Our Art of Today," *The Magazine of Art*, vol.11, 1888, p.289 292.

Marion Harry Spielmann, "In Memoriam: Sir John Everett Millais, Bart., P.R.A.," *Magazine of Art*, vol.19, 1896, i xvi.

Exhibition of Works by the Late Sir John Everett Millais, Bart., President of the Royal Academy, exh. cat., Royal Academy of Arts, London, 1898.

Marion Harry Spielmann, "A Sketch," *The Magazine of Art*, vol.22, 1898.

Marion Harry Spielmann, *Millais and His Works: With Special Reference to the Exhibi-*

tion at the Royal Academy 1898, Edinburgh and London, 1898.

William Blake Richmond, *Leighton, Millais and William Morris: A Lecture*, London, 1898.

Alfred Lys Baldry, *Sir John Everett Millais, His Art and Influence*, London, 1899.

John Guille Millais, *The Life and Letters of Sir John Everett Millais, President of the Royal Academy*, 2 vols., London, 1899.

Leighton, Millais, Tadema, Meissonier, London, n.d.

生前や没直後からミレイの芸術に対する批判が一部にあったが、それらは必ずしも一貫してラファエル前派時代からの乖離を問題にしていたわけではない。²⁰ 兄弟団を結成した若い頃と比較してのミレイへの紋切り型の否定的な見かたは、20世紀に入ってから形成され、定着したものである。E. I. Barringtonの*Fortnightly Review*²¹への寄稿は、ミレイの成功を芸術家としての墮落であると非難した最初の主要な論評と位置づけられる。同時代のイギリス大衆の美術に関する趣味と関連づけながら、彼の中・後期の作品群は知的な内容を含まない大衆迎合的なものであると断じた。しかし、その際にラファエル前派運動を引き合いに出しているわけではない。また、没後に出版されたA. L. Baldryの*Sir John Everett Millais, His Art and Influence*においても、ミレイの後期の画歴をあくまでもラファエル前派時代と対比させて批判しようとする姿勢は見られない。J. ラスキンの芸術批評には、評価の対象とする作品の諸特質の何に注目するかという点に関する一貫性の欠如と、彼の芸術観の根底にある道徳的観念を作品評価に適用する際の判断基準の不明瞭性もしくは恣意性などの難点があるが、²² 彼のミレイ作品についての不満はBarringtonらのそれとともに、次の世紀に隆盛した新しい美術批評と一部合致して、ミレイの画業に対する否定的な固定観念の形成に関わることになった。²³ ラスキンによる*Notes on some of the Principal Pictures of Sir John Everett Millais Exhibited at the Grosvenor Gallery*は、画家の生前に開かれた主要な展覧会に対する論評であり、ミレイの芸術を取り巻く批評の歴史を考える際には一定の意味を有するだろう。

ミレイ自身は絵画芸術の実践者であって理論家ではなく、芸術に関する自分の考えをまとめた文章によって表現することをほとんど行わなかった。美術批評家M. H. Spielmannに促されて書いたとされる²⁴ “Thoughts on Our Art of Today”が、画家による美術論として唯一活字になったもので、ごく短いものである。しかしそこには、彼が絵画について考えていたことの一部が確かに語られている。ミレイはまずイギリス美術の質の高さを擁護し、絵画におけるイギリス派への忠誠を表明している。そして当時、フランス美術を真似て同じような絵を描く若者たちがいることへの不満を述べ、イギリス人芸術家として着想と表現における個性を確立していくことの重要性を説いている。また、絵画における鮮やかな色彩の

使用と、簡単に描かれたかのように見える新鮮な外観の重要性を主張して、自分の作風に対する批判を意識した論述を行っている。

ミレイが67年と2か月余りの生涯を閉じた年に、画家の晩年に友人となった Spielmann によって書かれた “In Memoriam: Sir John Everett Millais, Bart., P.R.A.” は、画家の評伝として代表的なもので、ミレイの愛すべき人格にも触れながら彼の画業に最大級の賛辞を贈った。Spielmann は1898年には “A Sketch” を発表し、彼が同時代に並ぶ者がいないと考えたミレイの業績を重ねて称賛した。

画家の没後2年目に開催された大規模回顧展のカタログ *Exhibition of Works by the late Sir John Everett Millais* が資料として重要であることは言うまでもない。カタログによると、この展覧会には186点もの油彩作品が出品されたことがわかる。それぞれの作品に関する説明文は、ほぼパノフスキーの言う「事実的主题の記述」に相当するもので、固有名詞をあまり用いず、一般的な言葉によって客観的、中立的に、モチーフと、モチーフが人物の場合はそのポーズ等について記述されている。カタログにはその他に、作品の貸出者、制作年、署名の形式、支持体（キャンパス、板等）、作品の大きさ、作品に特定の典拠があり展覧会場でテキストからの引用が提示されていた場合はその引用文、といった客観的なデータが記載されている。特に最後の事項と作品の貸出者の中には、資料的価値の高いものが含まれている可能性がある。回顧展には油彩による完成作の他に、素描、水彩、油彩習作56点も出品され、カタログに記載されているが、これらについては客観的なデータのみで、描かれた内容に関する文章による説明は付けられていない。

回顧展に伴って Spielmann が出版した、*Millais and His Works: With Special Reference to the Exhibition at the Royal Academy 1898* も重要である。²⁵ 著者が編集していた雑誌にかつて掲載した “Thoughts on Our Art of Today”²⁶ と “A Sketch” を再録し、その上で回顧展の総評と、出品された油彩画の約9割について解説が書かれている。作品解説が本書の主要部分であり、作品には展覧会場における同じ番号を付け、展覧会カタログと補い合っ て読みやすくなるよう配慮されている。回顧展に出品されなかった約60点の油彩画についても作品解説が施され、出版された時点において最も多くの油彩作品についての作品解説目録とすることが意図されている。更に巻末には、油彩作品の制作年代順のリスト、版画として複製出版された作品のリスト、ミレイ作品のクリスティーズにおける売買価格という興味深いリストなどを加えている。著者によれば、巻末の作品リスト作成にあたってはミレイ自身の協力を得ており、出版時点で存在が明らかになった油彩画は351点を下らず、その数は当時王立美術アカデミーが把握していた数をはるかに凌いでいる、とのことである。²⁷ Spielmann が作成した制作年代順作品リストや売買価格表は、翌年出版された Baldry による *Sir John Everett Millais, His Art and Influence* の中で早速活用された。

Baldry の著作は、画家の人間性よりも画業に焦点を絞ったもので、ミレイが他の芸術家

たちに与えた影響と、当時のイギリス美術の動向の中に占めるミレイの画業の位置を主たる論点としている。画歴を年代順に追うだけでなく、人物画と風景画の章を設け、素描も重視するなどして、ミレイの多才さを強調している。また、同時代の美術批評も内容に加え、ミレイ作品を評価するためのより多くの視点を提供している。没直後の時点におけるミレイの画業の総括を意図したものと言えるが、著者の立場はミレイに好意的なもので、成功の源として彼の描写力を特に称えている。

1899年、画家の四男で芸術と自然、旅行などに親しんだ John Guille Millais²⁸ が父親の伝記 *The Life And Letters of Sir John Everett Millais, President of the Royal Academy* を出版した。これは2巻からなる大部の著作で、本文の部分は図版と挿絵を含んで900ページ以上あり、それに付録として、14世紀に遡るミレイ家の家系、作品の年代順リスト等が加えられている。作品リストには Spielmann の *Millais and His Works* にはなかった水彩画と単彩画が追加され、油彩画のリストの作品数は385点で Spielmann によるリストのそれを上回っている。それらに Spielmann のリストにはあっても J. Guille Millais が確認できなかった作品を加えると、画家ミレイが生涯に描いた油彩画の数として当時明らかになったのは約400点ということになる。この伝記は、息子が父親の生涯を理想化して記録にとどめるといふ姿勢が一貫しているため、一面的な記述がなされているように感じられる部分もある。しかし何と言っても画家を間近で見ている人物が、実際に見聞きしたミレイの言動と、ミレイが生前に画家仲間や上流の顧客や友人や家族とやり取りした多くの書簡を織り交ぜながら描き出した画家の人生は、随所で迫真性に富んでおり説得力がある。例えば上述の1886年の作品展開催のためにグロウブナー・アート・ギャラリーで展示の準備をしている時の様子²⁹ など、画家の姿が生き活きと目に浮かんでくるよう魅力がある。画家の息子であることを前面に出し、³⁰ 多くの資料を含んだこの著作は、ミレイの言わば公式の伝記と見なされて、長い間、画家の生涯を知るための最も基本的な文献であり続けた。

次に20世紀前半の単行図書のリストである。

Pictures, Drawings and Studies for Pictures made by the late Sir J. E. Millais, Bart., P.R.A., London, Fine Art Society, 1901.

Sir Wyke Bayliss, *Five Great Painters of the Victorian Era: Leighton, Millais, Burne-Jones, Watts, Holman Hunt*, London, 1902.

Alfred Lys Baldry, *Millais*, London, 1908.

Masters in Art, John Everett Millais, Boston, Massachusetts, November, 1908.

M. Hardie, *Wood Engravings after Sir John Everett Millais in the Victoria and Albert Museum*, 1908.

John Ernest Phythian, *Millais*, London, 1911.

Arthur Fish, *John Everett Millais 1829-1896*, New York, 1923.

William James, ed., *The Order of Release: The Story of John Ruskin, Effie Gray and John Everett Millais, Told for the First Time in Their Unpublished Letters*, London, 1948.

20世紀に入り、とりわけ1930年代末以降に芸術における前衛（avant garde）を重視する価値観が浸透すると、アカデミックな芸術とヴィクトリア朝時代の絵画に対する評価は下落した。中でもラファエル前派兄弟団という、モダニズムの批評家にとってはアカデミズムよりは見るべき要素があると判断される運動からも離れていったミレイは、厳しい批判の対象となった。そのような風潮の中では、ミレイをテーマとする展覧会が開催されなくなり、それが長期化すると研究者の関心は薄れていき、出版物の刊行も行われなくなった。³¹以後1967年まで、ミレイの芸術そのものを論じた出版は途絶えてしまった。

その間に例の紋切り型のミレイ観が形成された。アカデミーに史上最年少で入学した天才少年は、青年になるとラファエル前派兄弟団を結成してアカデミーの規範に反逆を企て、その溢れる才能によって中心メンバーのひとりとなった。たが、程なくしてアカデミーに准会員として受け容れられると変節し、高潔であることを捨て、芸術家としてあるべき生きかたを裏切り、富と名声を追い求める俗物と化していった。卓越した技量を駆使して大衆の好みに迎合した作品を次々と生み出しては社会を魅了し、豪邸を建て、作品を商業広告に提供するほどに墮落し、最後は王立美術アカデミーの会長職に就いて、社会の公的な規範に十分に認められて生涯を終えた、と。多くの人々に称賛されて富裕になることを悪と見なす一種の道徳観によって美術作品の価値までも否定するという、独特の論理がミレイに対しては適用された、³²と行うことができよう。私たちは、ヤン・ファン・エイク、ハンス・ホルバイン（子）、ペラスケス、ヴァン・ダイクといった画家について考える時、彼らが宮廷画家というそれぞれの時代と地域において画家として望みうる最高の地位を得たことを思い出して、作品評価を低めたりはしない。ティツィアーノ、リュベンス、ピカソらの作品を見る時、彼らが画家として稀に見る財産を築いたことを思い出して、作品の中に何かしらいいがわしい性質が潜んでいるに違いないと疑ったりもしない。

20世紀後半になると、1967年から1970年代の幾つかの展覧会の開催に呼応して、ミレイを論じた図書の出版が徐々に再開された。

Mary Bennett, *Sir John Everett Millais, Bart., P.R.B./P.R.A., exh. cat.*, Royal Academy of Arts, London, and Walker Art Gallery, Liverpool, 1967.

Mary Bennett, "Footnotes to the Millais Exhibition," *Liverpool Bulletin*, No.12, 1967, p.32-59.

- Mary Lutyens, *Millais and the Ruskins*, London, 1967.
- Gordon H. Fleming, *That ne'er Shall Meet Again: Rossetti, Millais, Hunt*, London, 1971.
- Mary Lutyens ed., "Letters from Sir John Everett Millais, Bart, P.R.A. (1829-1896) and William Holman Hunt, O.M. (1827-1910) in the Henry E. Huntington Library, San Marino, California," *The Walpole Society*, vol. 44, 1974, p.1-93.
- Mary Lutyens (intro): *The Parables of Our Lord and Saviour Jesus Christ with Pictures by John Everett Millais*, New York, 1975.
- Malcolm Warner, *The Drawings of John Everett Millais*, exh. cat., Arts Council of Great Britain, Bolton Museum and Art Gallery, London, 1979.
- Malcolm Warner, *Sir John Everett Millais*, exh. cat., Arts Council, Jersey, 1979.
- Geoffroy Millais, *Sir John Everett Millais*, London, 1979.
- Mary Lutyens and Malcolm Warner eds., *Rainy Days at Brig O'Turk: The Highland Sketches of John Everett Millais*, Westerham, 1983.
- Malcolm Warner, "John Everett Millais's *Autumn Leaves*: A Picture Full of Beauty and Without Subject," in Leslie Parris, ed., *Pre-Raphaelite Papers*, Tate Gallery, London, 1984, p.126-142.
- Malcolm Warner, *The Professional Career of John Everett Millais to 1863*, Ph.D. diss., Courtauld Institute of Art, London, 1985.
- W. J. Eggeling, *Millais and Dunkeld: The Story of Millais's Landscapes*, Perth, 1985.
- Patricia Bradshaw Gamon, "*Millais's Luck*": A Pre-Raphaelite's Quest for Success in the Victorian Painting and Print Market, 1848-1863, 2 vols., Ph.D. diss., Stanford University, Stanford, 1991.

M. Bennett によるものは、リヴァプールとロンドンで徐々に開催されたミレイ展のカタログであり、文献としても久し振りにまとまった量の学術的な内容を含むものとなった。次の回顧の機会には画家の生誕 150 周年にあたる 1979 年で、展覧会開催とカタログの出版があった。このうち、イギリス各地を巡回した素描展とジャージー島における企画展のカタログが、M. Warner によって刊行された。同年、画家ミレイの曾孫 Geoffroy Millais によって簡潔な伝記・作品集が出版された。これにはそれ以前の出版物にはあまり掲載されることのなかった習作や写真が収録されている。Warner は 1985 年、博士論文 *The Professional Career of John Everett Millais to 1863* において、ミレイの名声獲得への野心を認めた上で、彼の画業を経済的成功から切り離して評価しようと試みた。そして社会的成功の追求の問題は、P. B. Gamon の博士論文でも取り上げられた。

ミレイの再評価が広がりをもって本格的な展開を見せるようになったのは、ようやく 20 世紀末になってからのことである。以下のような図書の出版があった。

C. Donovan and J. Bushnell, *John Everett Millais 1829-1896: A Centenary Exhibition*, exh. cat., Millais Gallery, Southampton Institute, 1996.

Barbara C. L. Webb, *Millais and the Hogsmill River*, New Malden, Surrey, 1997.

Gordon H. Fleming, *John Everett Millais: A Biography*, London, 1998.

Russell Ash, *Sir John Everett Millais*, London, 1998.

Peter Funnell, et al., *Millais: Portraits*, exh. cat., National Portrait Gallery, London, 1999.

Debra N. Mancoff, ed., *John Everett Millais: Beyond the Pre-Raphaelite Brotherhood*, New Haven & London, 2001.

Annette Wickham, *The Gifted Hand: John Everett Millais from the Royal Academy's Collection*, Royal Academy of Arts, London, 2003.

Paul Goldman, *John Everett Millais: Illustrator and Narrator*, Aldershot, Hampshire, 2004.

Paul Goldman, *Beyond Decoration: The Illustrations of John Everett Millais*, London, 2004.

Paul Barlow, *Time Present and Time Past: The Art of John Everett Millais*, Hants, U.K. & Burlington, U.S.A., 2005.

Christine Riding, *John Everett Millais*, Tate British Artist, London, 2006.

Jason Rosenfeld and Alison Smith, *Millais*, exh. cat., Tate Britain, London, 2007.

Michael Robinson, *Millais & the Pre-Raphaelites*, London, 2007.

John Everett Millais, *Millais's Illustrations: A Collection of Drawings on Wood*, London, 2008.

Suzanne Fagence Cooper, *The Model Wife: The Passionate Lives of Effie Gray, John Ruskin and John Everett Millais*, New York, 2010.

J. Guille Millais による伝記が既にあって、当の画家の評価は低迷したままという状況では、敢えてそれを凌駕するような本格的な伝記を著そうという試みは長い間行われなかった。しかしようやく G. H. Fleming が、J. Guille Millais によるミレイ伝には多くの省略と不正確な点があって信頼できる伝記とは言い難いとして、³³ 本格的に執筆に取り組み、1998 年、ほぼ 1 世紀ぶりに新しい伝記を出版した。Fleming は J. Guille Millais が用いなかった多くの手紙や同時代の作品評価を資料として活用し、³⁴ ミレイの生涯を 24 の時期に分けて詳述

している。更に R. Ash がテキストと図版からなるもう 1 つの伝記を出版した。こちらはやや一般向けのもので、テキストの部分は画家の人生の簡潔なまとめであり、図版はラファエル前派時代のものが約 3 分の 1 を占めて、中・後期の作品では風景画が 1 点しかなく、ミレイの画業の縮図とするにはややバランスを欠いている感がある。ふたりの著者は別々に執筆を進めたようで、いずれも他方を参考文献として掲載していない。没後 100 周年の展覧会はどれも大規模なものではなかったが、ミレイ再評価に対する関心は着実に高まり、以後多くの新しい研究が行われることになった。振り返ってみれば、これら 2 つの伝記は、1990 年代末以降の一連の出版の嚆矢となるものであった。Warner の学位論文提出と Fleming らの出版の間が 10 年以上開いているが、20 世紀末になるまでミレイ研究の進展は緩慢なものだったのである。

翌 1999 年、ロンドン、ナショナル・ポートレート・ギャラリーにおける「ミレイ：肖像画展」は、特定のジャンルに焦点を絞った展覧会で、それにもなつてカタログ *Millais: Portraits* が出版された。³⁵ 20 世紀を通じて集中的に研究されることになつたミレイによる肖像画が、ラファエル前派時代とそれ以後に分けられ、後者の時期においては描く対象に応じて、子ども、男、女に分類されている。出品作のモデルは各界の名士や上流階級の夫人と子どもが多く、他に画家の家族を描いた肖像画が若干加えられ、それらをヴィクトリア朝社会とミレイの生涯の文脈の中でとらえ直そうと試みられている。

D. N. Mancoff 編集による 2001 年の *John Everett Millais: Beyond the Pre-Raphaelite Brotherhood* は、編者がミレイの没後 100 周年という節目の年にも「大規模な回顧展が全く企画されないことにショックを受けて」³⁶ 刊行された研究論文集である。挿絵を多く描いたことに端的に表れている画家と文学との深い結び付きと、文学作品に取材した絵画における画家による主題解釈の問題、³⁷ 風景画における自然の神秘の想像的ヴィジョンの提示、³⁸ 人生が慌ただしく過ぎ行くことに対する画家の鋭い感受性と無情や死の表現における類い稀な詩的表現力、³⁹ 画家の富と名声の形成と当時の美術市場との関係⁴⁰ など、作品および画家と周辺の事情も含めた諸問題が、ラファエル前派の理念に拘泥することなく多角的に論じられており、ミレイを再検討する研究の多様性が凝集された内容となっている。

P. Goldman, *John Everett Millais: Illustrator and Narrator* は、前出「ジョン・エヴァレット・ミレイ：出版された図書の挿絵展」を機に出版されたものである。同展のカタログと、展覧会への出品作以外のものも含めたミレイの当該ジャンルにおける同美術館の所蔵作品目録を収録し、挿絵画家としてのミレイの優れた思想性と感受性を明らかにするとともに、ミレイを単なる挿絵画家を超えた、絵画による物語者として提示しようと試みている。

P. Barlow は *Time Present and Time Past: The Art of John Everett Millais* において、ミレイの画歴の全体を扱いつつも、それまで論じられることが少なかったと著者が考える後期の画業の再検討に重点を置いている。そして示唆に富む多くの見解を述べている。一例とし

て、ミレイ独特の主題的関心として、命を触知できるものへと視覚化することを挙げている。存在と儂さを併せもつ命を絵画作品に表現する試みが、風景画、説話画、ファンシー・ピクチャーなど、ジャンルを越えて行われていることを、作品の精密な観察を通して指摘している。そのような考察を肖像画について行う時、1999年の「ミレイ：肖像画展」カタログとは別の視点を提供することにもなる。20世紀末以来本格化した研究が加速しているとも言えよう。著者は批評史も重視している。画家と同時代人によるミレイ批判と20世紀のモダニズムの批評家による批判を検証し、それらに共通する問題と著者が考える点について議論している。⁴¹ 総体としては、ヴィクトリア朝時代の文化的枠組みの中にミレイの画業の全体を正しく位置づけようとする試みであるが、ヴィクトリア朝の‘high culture’から‘low culture’までの文化的階層の中に、画家自身は自分の業績をどう位置づけていたのかを問いかけるなど、議論を閉じるというより更なる新しい議論を喚起すべく開いた状態で終わっている論点も含まれている。

C. Ridingによる*John Everett Millais*は、文学に取材した作品における主題の解釈と表現の独自性、主題性のない美の追求、そのような唯美主義的傾向におけるホイッスラーとの影響関係、17、18世紀の大画家やアカデミーの先達の作品に対するミレイのスタンス、ミレイの風景画の特質など、簡潔ではあるが、1984年のテイト・ギャラリーでの「ラファエル前派展」以降2005年までの展覧会の内容や研究成果を取り入れた、ミレイの生涯と画業の総説である。ミレイと同時代の画家の作品との比較研究も継続して行われており、L. Ormondの論考⁴²などは具体的な成果を挙げている。

それまでの約1世紀に渡る期間に行われた展覧会の中で最も重要なものとなった2007 - 2008年の大回顧展は、以上のようなミレイ研究の再開と活発化を受けてのものとして位置づけることができる。テイト・ブリテンから刊行された展覧会カタログ*Millais*には、J. RosenfeldとA. Smithがよるエッセイが収録されている。

Rosenfeldは、ミレイをイギリスという一国の小さな文脈で考察するだけでなく、国家の枠を超えたより大きな歴史的な文脈において考えるべき段階が来た、と説いている。具体的には、万国博覧会を含む国外への精力的な出品等によって海外でもよく知られていた国際人としてのミレイが大陸の芸術家や芸術運動に影響を与えていた可能性を検証すべきことを提唱している。そしてミレイがフィンセント・ファン・ゴッホに影響を与えたことを論じ、また、サルバドール・ダリによって《オフィーリア》が象徴主義と結びつけてとらえられたことを紹介している。他にミレイが影響を与えた可能性のある芸術家として、グスタフ・クリムト、アドルフ・メンツェル、アルフォンス・ミュシャ、ギュスターヴ・モローの名を挙げている。筆者はここにフェルナン・クノッッフも加えうると考える。

Smithは、Barlowが既に論じた、ミレイの芸術の価値を否定したモダニズムの批評に内在する問題を改めて取り上げている。更に、広く読まれたものではなかったようだが画家の

没後2年目に出版されたオリヴィア・シェイクスピア (Olivia Shakespear) による小説『ルパート・アームストロング (Rupert Armstrong)』(1898年刊) や、やや後の夏目漱石『草枕』(1906年刊) を引用して、この時期におけるミレイ作品の受容の一端を提示している。次にミレイと過去の巨匠の関係について論じ、ミレイが特定の伝統に留まることも特定の作品を明白なかたちで引用することも拒んで、伝統との関わりを曖昧なままにしたため、芸術的源泉を正確に特定することは難しいとしている。そして既に共通理解となってきた解釈であるが、ミレイが人物や自然の景色の日常的な外観の奥に潜む感情的な内容を示すこと、あるいは観者の内にそのような感情的内容を喚起することを意図したことに触れている。更に画家が詩作を行い、後期の風景画に好んで詩的なタイトルを付けた事実を指摘し、芸術上の特定の主義に分類することが困難な画家ではあるが、ミレイの芸術の象徴主義的な性質を重点的に論じている。

作品解説の部分は、ミレイの画業を、「ラファエル前派」、「物語と新しい風俗」、「唯美主義」、「大いなる伝統」、「ファンシー・ピクチャー」、「肖像」(日本展カタログでは「上流階級の肖像」)、「後期の風景画」(日本展カタログでは「スコットランド風景」)の7つのジャンルに分けている。わずかに先行した Riding の章立てに比べて作品の主題により密着した分類がなされていると言える。章立ては主義、主題、様式等に基づいたものであるが、それは画歴をおよそ年代順に追うことにもなり、「物語と新しい風俗」で取り上げる作品はラファエル前派円熟期の1852年に始まり、「唯美主義」は1850年代中頃以降、「ファンシー・ピクチャー」は1860年代中頃以降、「大いなる伝統」と「後期の風景画」は1870年代以降の諸作品を扱い、ミレイの画業が生涯に渡って革新を求めたことが章立てを通して明らかにされている。各章の冒頭には先行研究を踏まえた概説が添えられている。展覧会出品作については今後しばらくの間、このカタログの作品解説が基本的な文献となるであろう。

回顧展の後の出版を見てみよう。M. Robinson の著書は研究書ではないが、ミレイと周辺作家の作品約180点をカラー図版で収録しており、検索が不便な嫌いがあるが、簡便な資料として活用しうる。ちなみにミレイが生涯に描いた全作品数は約400点と推定され、⁴³ 現在、イェール大学イギリス美術センターの M. Warner によって、ミレイ作品のカタログ・レゾネが準備されている。⁴⁴

最も新しい図書出版として、2010年の S. F. Cooper によるものがある。ミレイと妻エフィー、エフィーの元夫ラスキンの3人については、既に W. James 編集による1948年の著書があるが、Cooper はエフィーの未公開の手紙と日記を調査し、画家ミレイのキャリアと芸術の展開における彼女の役割を明らかにしようと試みている。

最近の動向として、著作権が失効したとされる古い書籍が複写されて販売され始めていることがある。ミレイに関する書籍の複写版はここ2、3年間に現れ始め、1898年の回顧展カタログ、Spielmann, *Millais and His Works*、Richmond による講義、Baldry, *Sir John Everett*

Millais、J. Guille Millais による伝記、Bayliss, *Five Great Painters of the Victorian Era, Masters in Art, John Everett Millais* などがある。

Marion Harry Spielmann et al., *Millais, A Sketch by Marion Harry Spielmann, Preceded by Thoughts on Our Art of Today by John Everett Millais, with an Introduction by Jason Rosenfeld*, London, 2007. これは複写による再出版ではなく、先述の“ A Sketch ”において Spielmann が若干編集して収録したミレイの“ Thoughts on Our Art of Today ”を初出時⁴⁵の文章に戻し、“ A Sketch ”併せて再録し、全体に対して J. Rosenfeld が序文を付して新装出版したものである。

ミレイだけでなくラファエル前派とその周辺の画家に関しても 1990 年代中頃から、A. Smith、E. Pettejohn、T. Barringer、P. Trippi など、現在ミレイおよびラファエル前派と周辺の美術史研究を主導している研究者による出版が相次いでいる。主なものを下記に挙げてみる。

Susan P. Casteras and Alicia Craig Faxon, ed., *Pre-Raphaelite Art in Its European Context*, New Jersey and London, 1995, p.193 209.

Dianne Sachko Macleod, *Art and the Victorian Middle Class: Money and the Making of Cultural Identity*, Cambridge, U. K., 1996.

Alison Smith, *The Victorian Nude: Sexuality, Morality and Art*, Manchester, 1996.

Elizabeth Pettejohn, *Rossetti and his Circle*, London, 1997.

Tim Barringer, *Reading the Pre-Raphaelites*, New Haven and London, 1998.

Elizabeth Pettejohn, *The Art of the Pre-Raphaelites*, London, 2000.

Alison Smith, ed., *Exposed: The Victorian Nude*, exh. cat., Tate Britain, London, 2001.

Peter Trippi, *J. W. Waterhouse*, New York, 2002. (邦訳：曾根原美保訳 『J. W. ウォーターハウス』ファイドン、2006 年)

Allen Staley and Christopher Newall, *Pre-Raphaelite Vision: Truth to Nature*, exh. cat., Tate Britain, London, 2004.

Elizabeth Pettejohn, *Art for Art's Sake: Aestheticism in Victorian Painting*, New Haven, 2007.

Elizabeth Pettejohn et al., *J. W. Waterhouse: the Modern Pre-Raphaelite*, exh. cat., Groninger Museum, Groningen, 2008.

S. P. Casteras、A. C. Faxon 編集による論文集 *Pre-Raphaelite Art in Its European Context* は、ラファエル前派兄弟団の画業をイギリス絵画史の中にとどめず、より大きなヨーロッパ美術史の文脈の中でとらえようとする試みで、ラファエル前派とヨーロッパ美術の間の影響

関係を中心テーマとしている。ミレイに関する研究としては、長い間彼の芸術的墮落の象徴と見做されてきた《シャボン玉》を、ヴィクトリア朝後期における美術作品を積極的に利用した商業広告の勃興、同時期における芸術の消費のしかたの変化といった動向の中に適切に位置づけようとした L. Bradley の論文が収録されている。⁴⁶ 1886 年に制作されたこの作品を依然としてラファエル前派の伝統の継続との関係においてとらえている点は、本書が出版された 1995 年の時点におけるミレイ研究の進展状況の反映でもあるだろう。⁴⁷

E. Prettejohn による *Art for Art's Sake: Aestheticism in Victorian Painting* は、ヴィクトリア朝時代の唯美主義について 1999 年にも編著を刊行した Prettejohn⁴⁸ が更に考察を深めたもので、ロセッティ、ホイッスラー、レイトンらを中心に論じている。唯美主義がミレイの芸術についても基本的な視点の 1 つになってきていることは、上述した通りである。

ラファエル前派最後の画家とも呼ばれる J. W. ウォーターハウスは、ラファエル前派とその周辺の他の画家たちと同様、1960 年代以降徐々に評価を回復していたが、2000 年に《聖チェチーリア (*St Cecilia*) 》がヴィクトリア朝時代の絵画作品としては史上最高値で売買されたことによって大いに注目を集めた。⁴⁹ Prettejohn 他による *J. W. Waterhouse* は、2008 年、過去最大規模の回顧展が開催された時に刊行された展覧会カタログである。ウォーターハウスの作品については、まとまった数の作品を所蔵する公立の美術館がなく、展覧会カタログを見ても約半数が個人コレクションに入っており、そのうち半数近くは所有者が匿名である。公の所有になる作品にしても、イギリス、オーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国、ドイツ、台湾、日本など世界各地の美術館に 1、2 点ずつ分散している状況のため、展覧会はウォーターハウスの画業を総覧することのできるまたとない機会となった。

終りに

ミレイについては、ラファエル前派、ヴィクトリア朝時代の美術や文化や社会、唯美主義芸術、イギリス風景画、スコットランド風景画といった様々なテーマのもとで論じられているが、それらのタイトルあるいはその他のタイトルのもとでミレイを扱っている全ての文献を調査することは実際問題として不可能であるため、本論においてはミレイの名がタイトルに入っている単行図書については可能な限り完全なリストを作成することに目的を絞って調査を行なった。展覧会についても同様である。このように範囲を限定したものであるが、ここで作成された一覧が今後のミレイ研究の資料として役立てば幸いである。

注

- 1 本稿で言及するミレイの作品名については、「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」の日本語カタログに題目が翻訳されている場合はそれをそのまま使用することを基本とし、異

なる訳をあてた場合は参考のために原題を括弧内に表示する。「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」カタログにも邦題の載っていない作品の場合は筆者が原題を訳し、原題を括弧内に書き添える。

- 2 展覧会カタログ *Millais* に掲載されている作品数は 139 点であるが、うち 1 点は実際には出品されていない(カタログ番号 125)。挿絵連作やスケッチ等の数えかたはカタログに拠る。同カタログの出版データは、Jason Rosenfeld and Alison Smith, *Millais, exh. cat.*, Tate Britain, London, 2007。日本展のカタログは、『ジョン・エヴァレット・ミレイ展』朝日新聞社、2008 年。
- 3 テイト・ブリテンにおいて出品されたが、日本展では出品されなかった主な作品は以下の通りである。図録の章別に列挙する。1. ラファエル前派：《ペルーのインカ国王を捕らえるピサロ》(1846 年) 《イザベラ》(1848 49 年) 《ジェイムズ・ワイアットと孫のメアリー・ワイアット》(1849 年) 《エリエルに誘惑されるフェルディナンド》(1849 50 年) 《箱舟に帰り着いた鳩》(1851 年) 《花嫁の付き添い》(1851 年) など。2 物語と新しい風俗：《ユグノー(サン・バルテルミの日に、ローマン・カトリック教徒のバッジを身に着けて危険から自分を守ることを拒絶するユグノー教徒 (*A Huguenot, on St. Bartholomew's Day, refusing to shield himself from danger by wearing the Roman Catholic badge*))》(1851 52 年) 《追放された王党員 1651 年》(1852 53 年) 《ジョン・ラスキン》(1853 年) 《盲目の少女》(1854 56 年) 《和平の締結 1856 年》(1856 年) 《異教徒の逃亡 1559 年》(1859 年) 《ブラック・プランズウィッカー》(1859 60 年) 《身代金》(1860 62 年) など。3 唯美主義：《秋の枯れ葉》(1855 56 年) 《暇な時間 (*Leisure Hours*)》(1855 56 年) 《ソフィー・グレイ》(1857 年) 《春》(1856 59 年) 《聖アグネス祭の前夜》(1862 63 年) など。4 大いなる伝統：《エフタ》(1867 年) 《ロンドン塔の王子たち》(1878 年) 《支配的な情熱 (*The Ruling Passion*)》(1885 年) など。5 ファンシー・ピクチャー：《メヌエット》(1866 年) 《熟したチェリー》(1879 年) 《とらわれの女》(1881 82 年) 《シャボン玉》(1886 年) 《ペロニカの小さな可愛い青い花》(1891 92 年) など。6 肖像画：《双子》(1875 76 年) 《ジャージー島のユリ》(1877 78 年) 《W. E. グラッドストーン国会議員閣下》(1878 79 年) 《ルイーズ・ジョブリング》(1879 年) 《自画像》(1880 年) 《ケイト・ペルジーニの肖像》(1880 年) 《ベンジャミン・ディズレーリ、ピーコンズフィールド伯爵、ガーター勲爵士》(1881 年) 《アルフレッド・テニスン》(1881 年) など。7 後期の風景画：《川への流れ》(1871 年) 《冬の燃料》(1873 年) 《狩猟場の周辺》(1874 年) 《多くの水音》(1876 年) 《クリスマス・イヴ》(1887 年) 《名残の秋》(1890 年) 《バーナム峡谷》(1890 91 年) 《吹けよ、吹け、汝、冬の風よ (*Blow, Blow, Thou Winter Wind*)》(1892 年) など。

一方、テイト・ブリテンには出品されず、日本展において展示された作品は、日本の美術館が所蔵する作品を含む以下の 20 点である。1. ラファエル前派：《ヴァン・ダイクの工房にいるチャールズ一世とその息子》(1849 年)。2 物語と新しい風俗：《信じてほしい》(1862 年)。3 唯美主義：《アリス・グレイの肖像》(1859 年、新潟県立近代美術館 / 万代島美術館)。4 大いなる伝統：《遊歴の騎士》(1870 年) 《どうかご慈悲を！ 1572 年のサン・バルテルミの虐殺》(1886 年)。5 ファンシー・ピクチャー：《初めての説教》

- (1863年)《二度目の説教》(1863-64年)《国王衛士》(1876年)《旦那様宛の手紙》(1882年)《わすれなぐさ》(1883年)《名残のバラ》(1888年)《あひるの子》(1889年、国立西洋美術館)《使徒》(1894-95年)。6 上流階級の肖像：《エヴェリーン・テナント》(1874年)《ソフィア・マーガレット(・グレイ)・ケアード》(1880年)《サー・ヘンリー・トンプソン》(1881年)《自画像》(1883年)《トーマス・オールダム・パロウ》(1886年)。7 スコットランド風景：《「月、まさにのぼりぬ、されどいまだ夜ならず」 - バイロンの詩より》(1890年)《穏やかな天気》(1891-92年)。
- 4 上記のカタログ中の過去の展覧会一覧によると、ラファエル前派の名を冠した展覧会の開催は1913年を最後に一端途絶え、復活したのは1947年、バーミンガムにおいてである。翌1948年は、兄弟団結成100周年にあたり、マンチェスター、リヴァプール、テイト・ギャラリーなどでラファエル前派展が相次いだ。その後も同派の展覧会は、水彩や素描、挿絵、版画とカバーする範囲を広げながら断続的に開催され、1950年代終り頃から70年代にかけては、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、ウィリアム・ホルマン・ハント、ミレイ、フォード・マドックス・ブラウンら、個々の画家にも焦点が当てられるようになった。Millais, p. 259-260.
- 5 「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」カタログにおける邦題は、《彷徨える思考 (Wandering Thoughts)》。
- 6 同、《冬の燃料 (Winter Fuel)》。
- 7 同、《パーナム峡谷 (Glen Birnam)》。
- 8 この作品についての解釈は「Millais展」においても同様である。Rosenfeld and Smith, Millais, p.241 .
- 9 Rosenfeld and Smith, Millais, p. 259-26 『ジョン・エヴァレット・ミレイ展』, p.192-197。
- 10 Bart.はBaronet (准男爵) R.A.はRoyal Academician (王立アカデミー会員)の略表記。
- 11 Marion Harry Spielmann et al., Millais, A Sketch by Marion Harry Spielmann, Preceded by Thoughts on Our Art of Today by John Everett Millais, with an Introduction by Jason Rosenfeld, London 2007 p. 88 .
- 12 実際には会長に選出された時点で既に、喫煙が原因とされた喉頭癌の末期にあり、5月には病床に伏したため、実際に会長としての職務に就くことができたのは2か月余りのことであった。John Guille Millais, The Life and Letters of Sir John Everett Millais, President of the Royal Academy, 2 vols. London, 1899, vol. 2 p. 331-332 .
- 13 Exhibition of Works by the Late Sir John Everett Millais, Bart., President of the Royal Academy, London, 1898 p. 7-73 .
- 14 同時期にミレイに焦点をあてた展覧会としては、1983年、モントリオール美術館 (Musée de Beaux Arts, Montreal)における「『前景の真実』：ミレイ作《セイント・マーティンの夏》、《穏やかな天気》(『Truth of Foreground』: Millais' St Martin's Summer, Halcyon Days)」がある。
- 15 『ジョン・エヴァレット・ミレイ展』2008年、p.187-189。

- 16 もっぱら一般向けに書かれた記事等は省略する。
- 17 「ジョン・エヴァレット・ミレイ展」カタログにおける邦題は、《安息の谷間 (*The Vale of Rest*)》。
- 18 日本展のカタログ中、各章の最初の解説文は、説明によれば、テイト・ブリテン発行のカタログ *Millais* をファン・ゴッホ美術館とテイト・ブリテンが要約した *John Everett Millais* から翻訳したものである。
- 19 2000年の出版ではミレイ作品の収録数は計9点しかなく、そのうちラファエル前派以後の作品はわずか5点であった。一方、2009年の出版ではラファエル前派以後の作品だけで20点収録されており、そのうち日本における回顧展出品作は14点である。
- 20 本文中の文献リストに挙げたものの他に、Joseph Beavington Atkinson, "The London Art Season," *Blackwood's Edinburgh Magazine*, 106, August 1869, p.220 39、Harry Quilter, "The Royal Academy," *Universal Review*, May 1888, p.66 67 などがある。
- 21 論文の内容の性質上、外国の人物名等の固有名をカタカナに転記したり、書名等を翻訳したりすると、照合に手間取るばかりでかえってわかりづらくなるため、広く知られている名称か、特に必要な場合を除いて、原綴りのまま載せることとしたい。文中他所も同様である。
- 22 P. Barlow は、ミレイの後期作品《新鮮なニシン (*Caller Herrin'*)》(1881年)をラスキンが評価したことを例に、ラスキンの批評の意外性に触れている。Paul Barlow, *Time Present and Time Past: The Art of John Everett Millais*, Hants, U.K. & Burlington, U.S.A., 2005, p.117.
- 23 Ibid, p.195 199.
- 24 Marion Harry Spielmann et al., *Millais, A Sketch by Marion Harry Spielmann*, p.16.
- 25 ただし展示された油彩作品186点のうち、肖像画を中心に20点は省略されている。
- 26 この出版において、"Thoughts on Our Art of Today"は若干編集を加えられている。2007年に再出版された際には、ミレイの評論は元の文章に戻された。再出版の文献データは、本稿の注11を参照。
- 27 Marion Harry Spielmann, *Millais and His Works: With Special Reference to the Exhibition at the Royal Academy 1898*, Edinburgh and London, 1898, p.11 12.
- 28 John Guille Millais の生涯は、1865年 - 1931年。父ミレイが没した時、この伝記著者は31才であった。
- 29 J. Guille Millais, *The Life and Letters of Sir John Everett Millais*, vol.2, p.192 196.
- 30 タイトルページの著者名として、「彼の息子である John Guille Millais」と明記されている。
- 31 ミレイの晩年に王立美術アカデミーと対立し、20世紀に入るとイギリスにおける新しい芸術運動の中心人物のひとりとなった画家ウォルター・リチャード・シッカートは、1929年、雑誌への寄稿文において、ミレイに対する未だに冷めなやらない嫌悪感を些か度を越した語調で露わにした。彼は1927年から同年まで王立英国美術家協会 (*Royal Society of British Artists*) 会長の地位にあり、またその頃までには王立アカデミーも美術界の動向に対応してそれなりの変化を遂げ、シッカートは准会員になっていた。時代は

- 明らかにミレイに不利であった。Walter Richard Sickert, A.R.A., "John Everett Millais," *Fortnightly Review*, vol.125, 1929, p.753 762.
- 32 Paul Barlow, "Millais, Manet, modernity," *English Art 1860-1914: Modern Artists and Identity*, Manchester, 2000, p.49 63; idem, *Time Present and Time Past: The Art of John Everett Millais*, p.192 201.
- 33 Gordon H. Fleming, *John Everett Millais: A Biography*, London, 1998, p.2.
- 34 著者によれば、本書中に紹介された史料の4分の3が、それ以前の書籍で公開されたことのなかったものである。Fleming, *John Everett Millais: A Biography*, p.2.
- 35 展覧会への出品作品数は、油彩のタブロー約35点、水彩、単彩、習作等を加えて計55点であった。
- 36 Debra N. Mancoff, ed., *John Everett Millais: Beyond the Pre-Raphaelite Brotherhood*, New Haven & London, 2001, vii.
- 37 Mancoffによる上掲書中、Kimberley Rhodes, "Degenerate Detail: John Everett Millais and Ophelia's 'Muddy Death,'" p.43 68; Andrew Sanders, "Millais and Literature," p.69 93.
- 38 Mancoffによる上掲書中、Anne Helmreich, "Poetry in Nature: Millais's Pure Landscapes," p.149 180.
- 39 Mancoffによる上掲書中、Roger Bowdler, "Ars Longa, Vita Brevis: Life, Death and John Everett Millais," p.207 233.
- 40 Mancoffによる上掲書中、Laurel Bradley, "Millais, Our Popular Painter," p.181 205.
- 41 Barlow, "Millais, Manet, modernity," p.49 63 も参照。
- 42 Leonée Ormond, "Leighton and Millais," *Apollo*, February 1996, p.40 44.
- 43 Russell Ash, *Sir John Everett Millais*, London, 1998, p.8.
- 44 Mancoff, *op. cit.*, p.12 13.
- 45 *The Magazine of Art*, 11, 1888, p.289 292.
- 46 Laurel Bradley, "Millais's Bubbles and the Problem of Artistic Advertising." この論文が収録されている第4章のタイトルは、"Continuations of the Pre-Raphaelite Tradition (ラファエル前派の伝統の継続)" である。
- 47 邦訳のある書籍として、概説書であるが、ローランス・デ・カール著、高階秀爾監修、村上尚子訳『ラファエル前派：ヴィクトリア時代の幻視者たち』知の再発見双書94、創元社、2001年(原著：Laurence des Cars, *Les Préraphaelites: Un modernisme à l'anglaise*, 1999)があり、この中でラファエル前派時代から1850年代までのミレイの諸作品が紹介されている。
- 48 Elizabeth Prettejohn, ed., *After the Pre-Raphaelites: Art and Aestheticism in Victorian England*, Manchester, 1999.
- 49 Elizabeth Prettejohn et al., *J. W. Waterhouse: the Modern Pre-Raphaelite*, exh. cat., Groninger Museum, Groningen, 2008, p.21.

(2012年1月31日受理)